

平良港クルーズ振興に伴う 寄港地の環境影響に関する調査研究・現地見学

日本埋立浚渫協会 技術委員会環境・海洋部会

環境・海洋部会では、「クルーズ振興に伴う寄港地の環境影響に関する調査研究」を進めております。本研究では、「クルーズの現状」「国の施策」「クルーズ船の寄港動向と港湾の整備状況」等を調査・整理し、「クルーズ船による環境影響」をまとめる予定です。今回、調査研究活動の一環として、近年クルーズ船寄港回数の増加が顕著で、官民連携による国際クルーズ拠点形成する港湾に指定された平良港の整備状況とクルーズ船の入港状況を見学しました。さらに、内閣府沖縄総合事務局平良港事務所並びに宮古島市役所観光商工部観光商工課観光推進係を訪問し、平良港の概要と宮古島の観光振興についてヒアリングを実施しました。本稿は、それらの現地見学及びヒアリングについて報告するものです。

1. 平良港見学の概要

環境・海洋部会では、「クルーズ振興に伴う寄港地の環境影響に関する調査研究」の一環として、2019年10月15日～16日に沖縄県宮古島市平良港の整備状況とクルーズ船寄港状況の現地見学、内閣府沖縄総合事務局平良港事務所並びに宮古島市役所観光商工部観光商工課観光推進係へのヒアリングを実施しました。

平良港は、沖縄本島より南西約300kmに位置し、大小8つの有人島をもつ宮古地域の拠点港となっており、国の重要港湾に指定されています(図-1)。特に近年では、クルーズ船の寄港が急増しており、官民連携による国際クルーズ拠点を形成する港湾にも指定されています。環境・海洋部会が平良港を見学した16日には、クルーズ船「ワールドドリーム」(総トン数151,300トン)が寄港しており、クルーズ船寄港に関するハードとソフト両面における課題点と、それに対応した港湾整備と観光振興に取り組む必要性を実感することができました。

2. 平良港の整備

2-1. 平良港の概要

平良港は、宮古島市を港湾管理者とする重要港湾で

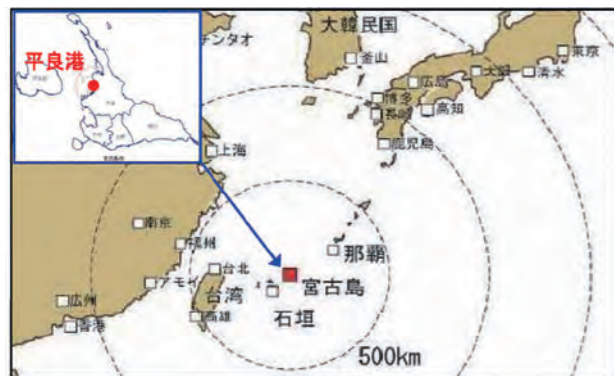


図-1 宮古島位置図

あり、国の港湾整備計画に基づく整備が進められています。平良港の定期航路は、沖縄本島(那覇港)經由博多・鹿児島)や石垣島(石垣港)經由台湾・中国)との間に就航し、島民の生活物資受け入れや周辺離島である多良間島への貨物積み替え拠点としての役割を果たしています。平良港は、下崎地区、漲水地区、トゥリバー地区の3地区から構成されており、それぞれの地区において機能分担がなされています(図-2)。

近年の平良港では、クルーズ船の寄港が増加しており、2014年は年間3隻であった寄港数が2018年には143隻となり、全国でも5番目にランキングされています(図-3)。このため、平良港におけるクルーズ船の受け入れには、いくつかの問題が生じています。一例として、宮古島市の市街地から最も近い漲水地区では、RORO船との兼用となっていることから、実態は50,000トン級以下のクルーズ船については暫定的に下崎地区において受け入れています。しかしながら、下崎地区は市街地から約3km離れ、砂・砂利、鉄スクラップなどの受入岸壁であるため、クルーズ船観光客を受け入れる玄関口としては課題があります。

さらに、50,000トンを超えるクルーズ船は沖泊し、上陸するためにテンドーボートを利用しています。ま

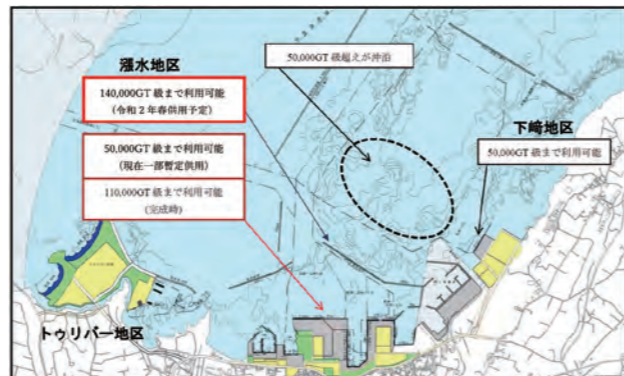


図-2 平良港港湾計画図

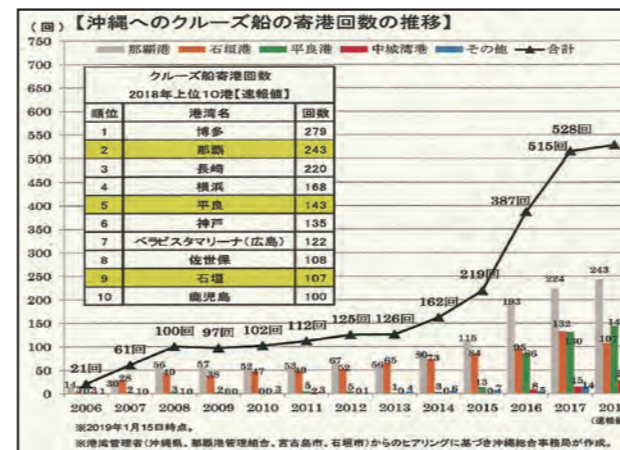


図-3 沖縄へのクルーズ船寄港回数

た、平良港には入出国に必要な税関検査、出入国審査、検疫設備(以下「CIQ設備」)を備えた旅客ターミナルがないため、2,000人の旅客が上陸するまでに約2時間半を要するという問題があります。

2-2. 官民連携による国際クルーズ拠点

クルーズ船受入環境を短期間で効果的に整備するため、民間クルーズ船社による旅客ターミナル設備などを整備する投資と、国や港湾管理者による受入環境を整備する投資を組み合わせ、官民連携による国際クルーズ拠点を形成する港湾の制度が創設されています。この制度は、民間のクルーズ船社にとっては岸壁の優先使用権を得られるという特徴があります。平良港は、国土交通大臣より2017年7月、官民連携による国際クルーズ拠点を形成する港湾に指定され、国が漲水地区に140,000トン級(当初計画)岸壁(図-4)と臨港道路を整備し、民間のカーニバル・コーポレーション&PLC(以下「カーニバル社」)がCIQ設備を持つ旅客ターミナルビルを整備する計画となっています。

また、これに伴い宮古島市では、土地利用計画を変更して商業施設エリアなどを整備して旅客動線の快適性を向上させるとともに、将来的に新たな玄関口として期待されている下地島空港の活用等を視野に、宮古



図-4 クルーズ船岸壁完成予想パース



【平良港】官民連携国際クルーズ拠点形成計画書(目論見書)の概要
 応募者 沖縄県宮古島市、カーニバル・コーポレーション&PLC(カーニバル社)
 国際クルーズ拠点形成の目標 ○中国発着クルーズの主要拠点寄港地 ○将来的には下地島飛行場の活用等を視野にフライ&クルーズによる発着港への発展
 寄港回数の目標 運用開始年(H32年):250回 目標年(H38年):310回

2-3. クルーズ船岸壁と臨港道路の整備状況

平良港において国が行っているクルーズ船受入環境の整備事業は、港湾の拡大整備により第二線防波堤となった施設を活用して、その前面(港外側:図-5の赤線部分)に延長420m(当初370m)の岸壁を築造し、その背面(港内側:図-5の緑線部分)に臨港道路を築造する計画となっています。この事業は、岸壁(-10m)築造工事と臨港道路築造工事等がありますが、2020年春より暫定的に140,000トン級のクルーズ船が受入可能となるよう、急ピッチで施工が進められていました。

岸壁(-10m)築造工事は、ジャケット(長さ60m×幅20m×高さ9m)3基とドルフィン5基による棧橋構造となっています(写真-1)。港湾計画の一部変更によりクルーズ船が大型化したため、今回の工事では棧橋構造の岸壁延長が当初の370mから420mに変更となりました。さらに2020年春の暫定供用以降、水深を10.0mから10.5mとする計画になっています。

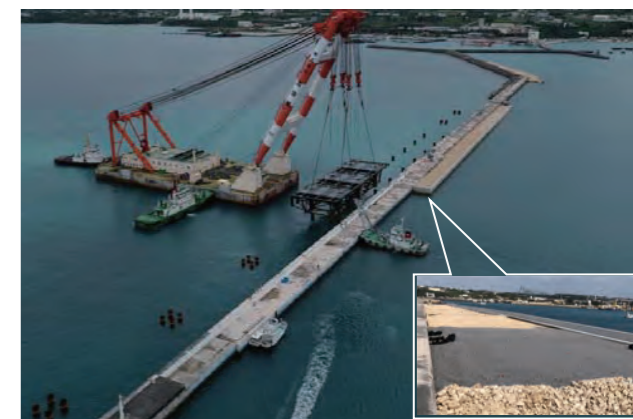


写真-1 ジャケット据付と臨港道路施工状況



写真-2 沖泊のクルーズ船とテンドーボート

3. 宮古島市観光振興とクルーズ船

3-1. 宮古島市が整備する施設

宮古島市は、クルーズ船旅客の利便性を向上させるため、CIQ 設備を持つ仮設の旅客ターミナルを整備し、その周辺に観光案内施設、二次交通車両(バス、タクシー、レンタカーなど)やシャトルバス(クルーズ船旅客を岸壁と旅客ターミナルの間で移送)の発着場を整備する予定です。なお、官民連携による国際クルーズ拠点形成する港湾により、カーニバル社がCIQ 設備をもつ旅客ターミナルを整備する計画となっていますが、建設位置に関する合意が得られずに整備が遅れています。

3-2. クルーズ船の寄港

平良港にクルーズ船「ワールドドリーム」が寄港しているのを見学しました。総トン数 151,300トンの「ワールドドリーム」(全長 335m、全幅 40m、定員 3,376 人)は約 2km 離れた沖に停泊していましたが、その存在感は陸からでも十分に確認でき、突如海上に巨大なホテルが現れたかのようでした。「ワールドドリーム」は沖泊の為、旅客はテンドーボート(約 120 人/隻、7~8 隻でピストン輸送)を利用し上陸していました(写真-2)。テンドーボートを降りた旅客は、諸手続きのため既設の旅客ターミナルを通りますが、旅客数に対



写真-3 混雑する既設の旅客ターミナル



写真-4 タクシーを待つ旅客

して十分なスペースと設備がないため非常に混雑していました(写真-3)。さらに、市街地へ観光に訪れようとする旅客は、タクシー乗り場で長い列を作っていました(写真-4)。このような状態を目の当たりにし、クルーズ船旅客の利便性を向上させるため、ハード面整備の必要性を強く感じました。

一方、クルーズ船寄港と関係のない生活をしている宮古島市民にとっては、クルーズ船が滞在する短時間に非常に多くの旅客が市街地などを訪れるため、様々な問題が生じていることが判りました(図-6)。

3-3. 宮古島市の観光振興

近年(2015 年以降：伊良部大橋開通)宮古島市への観光客数は増加の一途をたどっており、今後も下地島空港やクルーズ船の受入環境が整備されるとともに、新規ホテルの開業が計画されていることから、観光客数はさらに増加すると見込まれています。そこで宮古島市は、2019 年 3 月に「第 2 次宮古島市観光振興基本計画」を策定し、観光振興に向けた施策方針を掲げています。さらに、この施策を推進するために同年 7 月 31 日には「宮古島市観光推進協議会」を設置し、そのなかで官民が連携して観光に関する施策と諸問題について実務担当者レベルで議論し、具体的な対応をしています。特に、

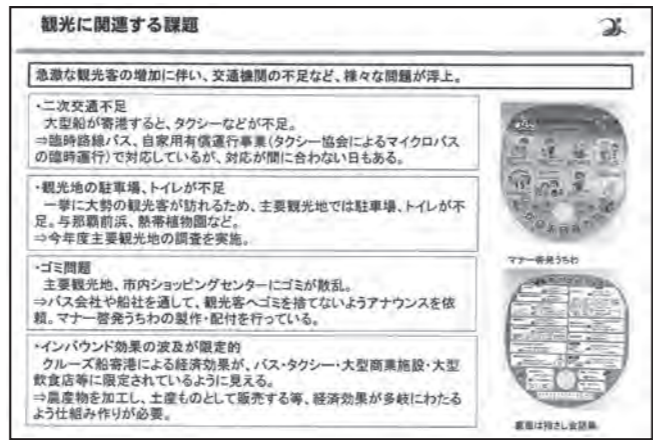


図-6 クルーズ船寄港に伴い発生する問題点



写真-5 宮古島市ヒアリング

クルーズ船旅客の満足度向上と宮古地域の振興は喫緊の課題となっています。その一例として「エコアイランド宮古島」の環境を守るためにゴミを捨てないよう観光客を対象に「マナー啓発うちわ」(外国語版)を製作、配布しています(図-6)。

また、クルーズ船の旅客は朝から夕方までの短時間滞在に対して、飛行機利用の観光客は宿泊を伴う滞在中が多いため、宮古島市では観光による地域産業の経済波及効果向上を狙い、オーバーユースとならないことを前提に、フライ&クルーズを展開させようとしています。さらに、宮古島市最大の観光資源である美しい自然を守り「持続可能な島づくり」を確立させるためにエコ活動を活発化している企業を「エコアクションカンパニー」として認定する制度をスタートさせています。

この他にも、観光シーズンである 3~10 月以外の閑散期の対応をどのようにするか、宮古島市の水資源を守るために特定の宿泊施設(例えばプール付きのホテル)には取水制限を実施する、といった検討も行っています。急激に増加する観光客に対し、発生する問題は多岐に渡っていますが、その都度市民への理解と協力、地元企業との連携を大切にしながら、観光振興を推進している様子が伺えました。

なお、クルーズ船自体が宮古島市(平良港)の環境(例えば水質や大気汚染、騒音など)に影響を及ぼすようなことについて質問したところ、クルーズ船が停泊する海域にはもともとサンゴの生息は無く、また滞在中が短時間であるため、その他の影響についても現時点では確認されていないという回答でした(写真-5)。

4. おわりに

今回の平良港見学を通して、クルーズ船による環境影響については、受入環境の整備といったハード面と



写真-6 クルーズ船をバックに

旅客の利便性やそこに住む人の快適性などというソフト面における課題があることが判りました。そしてその解決には、地域特性を考慮した上で、官民が連携して港湾整備と観光振興に取り組む姿勢が大切であると感じました。

最後に、今回のヒアリングや現地見学会を快く受け入れていただいた、内閣府沖縄総合事務局平良港湾事務所長・與那覇健次様、工務課長・長田淳様、工務係長・國場幸恒様、宮古島市役所観光商工部観光商工課観光推進係主任主事・永田良彦様、主任主事・友利未咲様、係長・伊佐智彦様、若築・吉田特定建設工事共同企業体 JV 所長・大田博文様、ほか関係職員の皆様には大変お世話になりました。紙上ではありますが、厚く御礼を申し上げ、感謝の意を表します。

【執筆者：りんかい日産建設(株)新谷 聡】

【出典】

- 1) 平良港港湾計画一部変更 国土交通省 (平成 30 年 11 月 14 日 交通政策審議会第 72 回港湾分科会 資料 1-3)
- 2) 平良港国際旅客船拠点形成計画 (平成 29 年 12 月 宮古島市)
- 3) 平良港概要資料 令和元年 10 月 15 日 (沖縄総合事務局平良港湾事務所)
- 4) 国土交通省 HP 報道発表資料「官民連携による国際クルーズ拠点」を形成する港湾を選定 (平成 29 年 1 月 31 日 資料 2)
- 5) 工事概要書 若築・吉田特定建設工事共同企業体 配付資料
- 6) 宮古島観光の状況について (2019 年 8 月 30 日 宮古島市役所観光商工部観光商工課、建設部港湾課)